第８回　首都大学東京図書館本館主催講演会

『ブックトークの楽しさ～読書の楽しみを共有しよう～』講演会レポート

講師：志茂田 景樹氏

閲覧担当　鵜川良恵
工藤優花子

講師プロフィール
志茂田 景樹氏

1940年静岡県出身。小説『黄色い牙』で直木賞を受賞。
近年、特に社会活動に尽力しており、「よい子に読み聞かせ隊」を結成。隊長として読み聞かせボランティアメンバーとともに全国で活動を行う。

開催概要

日時：2013 年 11 月 19 日(火)
　　16：30 ～ 18：00
会場：首都大学東京南大沢キャンパス　講堂小ホール
参加者数：117 名

講演の中で登場した以下の本は
本館でも所蔵しています。

石川淳『紫苑物語』講談社 , 1989
　本館：２Ｆ一般書架
　資料 ID：012682129
　請求記号：/910.8/KO19K/I-A-2
※その他『石川淳集』等にも収録
志茂田景樹『黄色い牙』Kiba book, 2002
　本館：２Ｆ一般書架
　資料 ID：10003086636
　請求記号：/913.6/Sh51k/2009

講演内容※以下、講演より抜粋

「小説を書こうと思ったきっかけ」

ぼくは文学少年でも文学青年でもなかった。どちらかといえば、映像・映画のほうに憧れていて、大学に通うかたわら、俳優養成所に行っていた。養成所ではエキストラのアルバイトをしていた。2年留年してアルバイトをしていたが、そのバイト先に早稲田の西洋哲学科の学生が来ていた。彼は留年8年目で、典型的な哲学青年だった。その彼が、酔うといつも読め読めと薦めてきた日本文学で一番の傑作だという短編があった。石川淳という作者の書いた、『紫苑物語』と言うタイトルの物語だった。その『紫苑物語』を読んで感動した時にきっと強い作家志望が心のうちに起こったと思う。今まで色んな体験や、見聞をしてるから、ひとつ小説を書いてみようかなと、そういう気持ちを起こさせてくれた。保険の調査員をやっていた 29歳のときだった。

「執筆開始と直木賞受賞」

保険の調査員の仕事で鈍行列車移動中、激しい痛みに襲われ、医者に行くと虫垂炎、盲腸だった。40度以上の熱が3日以上続いた。そのうち熱は下がったが、1ヶ月近く入院させられた。でもそのおかげで、退屈で退屈で、そうだ小説でも書いてみようと、70枚の小説を書いた。すると『オール讀物』の新人賞の2次予選までいった。7年後、36歳の時に新人賞を受賞することができた。その 4年後、『黄色い牙』という作品で直木賞を受賞することができた。

「景樹ファッションのきっかけ」

直木賞を受賞して 1、2年後、41、2歳のころ。自分を解放したいなあと思った。40超えて、気づけば自分の心が重くなっている。余計なお札をペタペタ貼りつけている。傲慢の札、あるいは虚栄の札、あるいは人をねたむ、羨望する札かもしれない。不要な札を貼りつけているから心が重い。できるだけはがせる札ははがしていこうと、そういう風に強く思い始めた時期だった。ニューヨークに滞在していたアパレル関係の友人が帰ってきて、あなただった

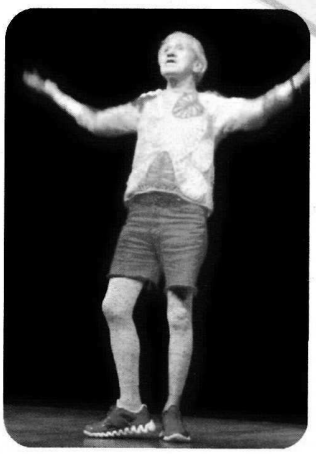
ら似合うんじゃないかなと言ってある包みをくれた。中身は何かなと思い開けたら、当時ニューヨークっ子の間、当然女性の間で大流行していたアメリカングラフィティタイプのタイツだった。マリリン・モンローの顔を下からずっと上にプリントしてあった。こんなもの履けるわけないじゃないかとソファーに投げ出したものの、バスルームに入って出てくると、なんだか気になって、あらためてそのタイツを手にして広げたら、履きたくなった。それを履いて、気に入ったTシャツを着たら、何か歩いてみたくなった。今でこそ、この格好で表参道歩いても、全然誰も何も言わない。でも当時はぎょっとされた。うしろ指を指されたりもした。1キロ以上歩き、進むも地獄引くも地獄。ならば進んでやろうと開き直ったら何故か、白眼視されることが苦痛でなくなった。それ以来僕のファッションはタイツが主軸のものとなった。装いは、自分が装ってそして心地が良ければいいじゃないかと、着たいものを着ようと。そういうファッション感覚の代わりにまあいろんなところにそれまでの意識を変えた結果として出ているけれど、まずはファッションに現れたということだと思う。

ぶれてしまっていますが…
マリリン・モンローのタイツ

「読み聞かせの楽しさ、読書の楽しさ」

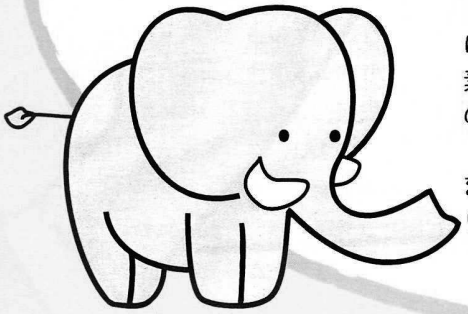
よけいな札をはがすこと、そういう感覚と気を1つにしたものは、実は読み聞かせ活動であった。読み聞かせを始めたきっかけは、ぼくがKIBA BOOK という小さな出版社を1996 年に立ち上げたこと。出版社のPR のため、北海道から沖縄まで行き、書店でサイン会を始めた。予め本を購入して持ってくる人もいたけれど、周りはやじうまだった。それで、読み聞かせでもやってみようかなという思いが生まれた。でもこの思いは子どもの頃母親から読み聞かせをいっぱい受けて育って、とても心地よい思いをしたという記憶が今でも頭の中に強く渦巻いていて、そのことと、どこかでしっかり結びついた思いだったと思う。福岡市のサイン会場に行ったら玩具コーナーの隣の書店だったので子どもがたくさんいた。これは読み聞かせだな、と強い突きあげるような思いに任せて読み聞かせをした。『3 匹のこぶた』と『赤いろうそく』の2 つだった。騒いでいた子どもたちがすぐ静かになり、気が付いたら大人も童心の世界、童話の世界に入り込んでいた。そして2 つの話を読み聞かせた僕自身が、終わった後とてもすがすがしい気持ちになっていた。子どもたちがあんなに喜んでくれた、大人もみんな物語の世界に飛び込んできてくれた、そしてそれを読んだ僕の心が洗われた。こんないいことはない、これからずっと読み聞かせ活動を続けていこうと思った。それがずっと続いてきている。続いているということは、いつも初めて読み聞かせをした時と同じ感動がちゃんと心に湧きあがってくる。同じ話をしても、それを聞いてくれる人たちは新しく出会った人たち。そして読み聞かせは読み手と語り手の間に何の垣根もない。一緒に物語世界を広げていって、そこで得られた感動を分かち合うことができる世界である。だから、絵本の読み聞かせというのはとても素晴らしい世界だと思う。理屈は関係ない。押しつけでない、感動を通して、その絵本、本が持っているメッセージが無理なく子どもたちに伝わる。だからとても素晴らしいのではないかなと思う。

担当者より



志茂田先生は、ご自分の人生を振り返りながら、本との出会い、人との不思議な縁(えにし)、自分を解放し余計な札をはがしていく生き方、読み聞かせの素晴らしさなど、多くのことを伝えて下さいました。

そして、読み聞かせについて、語り手と聞き手の間には“何の垣根もない。一緒に物語世界を広げていって、そこで得られた感動を分かち合う事ができる世界”とおっしゃっていました。読書が個人の体験を超えて、人とのつながりを作るきっかけとなるという意味だと感じました。

講演会最後の『ぞうのこどもがみたゆめ』の読み聞かせは、情感のこもった素晴らしいもので、目の前にサバンナの草原や星空が見えるようでした。

先生の生き方そのものも含め、大変心に残る講演会となりました。今後も図書館職員として、本と人、人と人とのつながりを作るお手伝いをしていきたいと強く思いました。